



「人を旅する」春野の暮らし案内として、令和元年10月27日、NPO法人「雲を耕す会」に依頼され、私（生きがい特派員 池谷）は昨年が続いて、春野の暮らしの案内をした。

まず、春の町の歴史として、春野町在住の郷土史家の木下恒雄（86歳）の講座を開催した。会場は、通所介護施設「みんなの家」（浜松市天竜区春野町）。

木下さんは、「遠州林業」「お茶の文明史」「春野の自然災史」など、著書30冊余。民族学者の宮本常一のように、本を書くときは、100人くらいの人に会っては、それをもとに書いていくという。

昨年は、国会図書館から明治時代の新聞のコピーを取り寄せて、丁寧に分類しては、春野の自然災害史、林業史、お茶の文明史などを書いてこられた。

木下恒夫さんは、元警察官である。ワープロのない時代には、和文タイプライターを独学して、文字を打ちこんだ。3台も購入して、それで原稿を書いた。

今回のお話は、「村にやってきた文明開化」として、春野町の集落が生まれる元になった明治の王子製紙の設立について中心に語っていただいた。

明治時代の「地租改正」がもとになり、「地券」を大量に発行することになり、それまでに和紙ではなくて、洋紙のパルプ工場の建設が必要になった。そこで、森林が豊富にあり水運に適した気田川のある春野町が候補になった。春野が木材パルプ発祥の地となったのだ。

それらの総指揮をしたのは、明治の資本主義の立役者である、渋沢栄一であった。その渋沢の生涯に触れ、かれが明治の資本主義のシステムをいかに作り上げたかということ語ってもらった。

また、天竜川の治水、そして地産に功績のあった、地元の遠州の金原明善の生涯、渋沢栄一との接点についても語った。

講座の後、王子製紙の煉瓦の建物の見学をした。現在は、春野中学校の校舎の敷地内にある。

問い合わせ：NPO法人雲を耕す会：TEL053-436-5221

木下恒雄：TEL053-985-0186

浜松市北部特派員 池谷 啓

